

途絶えた地域の文化を再び持続可能なものに

SDGs特集 地域文化 × SDGs

第13回

近年、多くの地域でこれまで大切に育まれてきた伝統的な文化が、失われつつあります。その理由は、高齢化や担い手不足などさまざまですが、こうした地域独自の文化は、まちづくりや周辺の自然環境保全にも密接に関わっており、持続可能な地域をつくるためにも、解決すべき課題の一つとなっています。

失われた柿渋文化を守りたい

山県市伊自良地区でのみ栽培される柿渋「伊自良大実柿」。渋が強く干し柿になると糖度が非常に高くなることから、11月を過ぎるとこの地域には軒先にワラで編まれた連柿が吊るされ、90年以上受け継がれる伝統的な風景となっています。しかし近年、地域の高齢化が進み、伊自良大実柿を栽培する農家は年々減少。それに伴って、管理ができなくなった耕作放棄園が増加の一途をたどり、文化の衰退だけでなく、土地の荒廃をももたらす地域課題となっています。

2016年に地域おこし協力隊としてこの地に移住してきた加藤慶さんは、この文化に魅了され、継承を決意。地域住民に教わりながら、維持が困難になった畑の草刈りや収穫、出荷などの管理を行うほか、地域で作られた伊自良大実連柿をインターネットで販売する「柿BUSHI」を立ち上げました。

また加藤さんは、伊自良大実柿に含まれる上質な柿渋を使って、衣服や小物を染める柿渋染めの体験をスタート。柿渋染め体験は、「自然な色合いが楽しめる」と好評を博し、県内外から多くの人が訪れるようになりまし。加藤さんは、「柿渋は、古くから防腐や防虫、抗菌作用のある自然の塗料や染料として、暮らしに息づいていました。柿から生まれる古き良き文化を、少しでも多くの人に知ってもらいたい」と、熱意を語ります。



ワラで10段の干し柿を編んだ「伊自良大実連柿」が、地域の秋を彩る

地域以外の人たちがその価値を評価

柿渋は、熟す前のまだ青い渋柿の実からつくられます。しかし、上質な柿渋を得るためには、収穫後、新鮮な柿の実をすぐに砕き、压榨しなければなりません。そこで、毎年人手が必要な青柿の収穫期に、収穫を手伝ってくれるボランティアをSNSなどを通じて広く募集することにしました。すると、地元住民はもちろん、大学生や県外の人など、20〜30人の応募が集まったといいます。

「参加者の中には、私が行っている活動の背景を聞いて、『ぜひこの文化を残したい』と、思いを共有してくれる人も多くいます。外から来た人が興味・関心をもってくれることで、地域の人たちの間でもこの文化の価値を再認識し、『守っていかなければ』という意識が高まったように感じます」と、予想以上の成果を実感する加藤さん。岐阜が誇る伝統文化を守るという思いは、地域を超えて広がっています。



毎年、夏に行われる青柿ちぎりは、県内外から多くの人が参加

伝統文化を広める新たな試みも

現在、柿BUSHIでは、さらに伊自良地区に息づく文化を伝えるようと、新たに加わった女性スタッフを中心に、柿に関する自然体験を企画。今後は、柿の葉を乾燥させた柿の葉茶や、昔ながらの柿の葉寿司などを作るイベントも行っていく予定です。自然の恵みを余すことなく活用し、自然と共存する文化は、まさに日本人が古くから実践してきた、持続可能な暮らし方。先人たちが築いてきた伝統文化には、私たちが日常の中のできる、SDGsアクションのヒントが隠されているかもしれません。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGsとは、持続可能な開発に向けて、2015年9月の国連サミットで採択された世界共通の目標で、17のゴールとその達成に向けた具体的な169のターゲットが示されています。岐阜県は2020年に、SDGs達成に向けて優れた取り組みをする「SDGs未来都市」に選定されました。



伊自良地区の文化を伝える柿BUSHIの加藤慶さん

OKB 大垣共立銀行

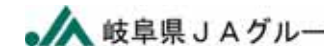
一生涯のパートナー

第一生命

Dai-ichi Life Group



長谷虎紡績株式会社



こころにとどく
花キューピット 岐阜支部



リード[li:d]進学塾 予備校

JUROKU Financial Group



私たちは持続可能な開発目標SDGsを支援しています。

プロジェクト特設サイトオープン

最新事例を紹介

支援している企業の
取り組み情報や活動事例の
紹介はこちらから



取り組み企業、事例についてお寄せください。

SDGs岐阜推進プロジェクト事務局
中日アド企画 岐阜支社内
岐阜市柳ヶ瀬通1-12 岐阜中日ビル7階
TEL.058-265-6281